

研究テーマ：表現力を高め、表現することを楽しめるようにするための指導の工夫

所属 室戸市立吉良川中学校

氏名 佐藤 真智

R G J H 2

1 研究の背景

対象とする3年生は、音読の声も大きく、毎日の家庭学習にも地道に取り組めるなど、基本的な英語学習の姿勢は比較的身に付いている生徒たちである。全体として学習への意欲もあるが、英文で表現する場面では、自信の無さからやや消極的になりがちで、語法の不正確さが目立つ。そこで3年間の英語学習の仕上げとして、英語による表現活動を楽しめるようにしたいと思い、この研究テーマを設定した。

2 リサーチ・クエスチョン

新出の文法事項の定着を図り、表現力を高めていくにはどのようにすればよいか。

3 予備調査

予備調査1 授業観察の結果

英文で表現する場面では、初めからあきらめている生徒や、語句の並べ方が十分理解されていないと思われる英語表現をする生徒が目立つ。

予備調査2 アンケート、授業評価の結果

単語や英文の読み取り等には自信があると答えた生徒が多いが、英語学習において最も難しいと感じていることは、「英語による会話」「英作文」であり、理由は「英語の語順がよくわからないから」と答えた生徒が7割を占めている。また、数名の生徒は、「語彙力の不足」を理由としてあげている。

予備調査3 英語力を示すデータ

CRTの結果からは観点別・領域別それぞれから見て、全国比を下回るものはないが、領域別に見て「書くこと」、観点別に見ると「表現の能力」において若干低い数値が示されている。

4 仮説の設定

仮説1 英文の基本構造についての集中的な学習を行うことで、英語の基本的な語順が定着し、新出の文法事項に対する理解と定着が容易になる。

仮説2 新出の文法事項を使って表現をする練習を増やしていく。その際場面設定を重視したり自己表現を取り入れたりすれば、表現方法への理解が深まる。

仮説3 英語で話す機会を増やせば、語感によって自然に英語を身に付けることができ、表現することにも慣れてくる。

仮説4 英文による表現活動と関連付けて語彙を増やす取り組みを行えば、使用頻度の高い単語から効果的に身に付けていくことができ、語彙の不足している生徒たちも表現活動に参加できる。

5 計画の実践

仮説1について

英文の基本的な構造についての学習の後、それに基づいて、語順を定着させるための平易な英作文練習を行った。その際、使用頻度の高い単語や語句を事前に確認した上で英文表現に移るようにし、単語がわからないことがつまずきにならないよう配慮した。また、その後の学習でも、常に語順に注意を払えるよう、基本的な語順を書いたものを掲示して定着を図った。

仮説2について

新出の文法事項を使って英文表現を行う回数を増やし、表現方法の定着を図った。英文のリピーティングでは場面をイメージさせ、自分の言葉として発音をさせるようにした。また、新出の文法事

項について基本的に理解できた段階で、自己表現活動を行い発表し合った。

仮説 3 について

授業のウォーミング・アップで行う英会話の時間を増やし、学校生活のあらゆる場面で気軽に英語で話しかけるなど、英語に親しみ、英語を使うことに慣れるようにした。

仮説 4 について

英文表現の際に、使用すべき単語や語句を事前に確認し合い、取り組みやすくするとともに語彙の習得も図れるようにした。また、毎年 **3** 年生に対して行っている単語総復習の取組を、英文の基本構造への学習を終えた段階で開始し、英文による表現活動と関連付けるようにした。その際、英文の構造を考えて、特に動詞と名詞をしっかり覚えるよう強調した。

6 実践の結果

英文の基本構造の定着を図ったことで、主語・動詞などの語順を自然に意識するようになり、英文表現や英文理解が以前よりも容易にできるようになってきた。特に、英作文や自己表現では、語順に関する助言を与えなければならない場面が格段に減り、単語さえわかれば、自分で英文を組み立てることができるようになってきた。また、会話や表現の機会を増やしたことで、英語で表現することへの抵抗があまり無くなり、表現活動を楽しむ生徒が増えてきた。新出の文法事項の定着に関しては、テストや口頭での反応が良くなってきたことなどから、一定の成果は感じられるものの、まだ十分であるとはいえない。場面をイメージしてリピーティングを行ったことに対しては結果の検証が難しいが、生徒たちが徐々に表情豊かに言えるようになってきたことから、彼らがその英文を意味あるものとして受け止め、英文表現を場面と結びつけることに役立っているのではないかと思う。また、表現活動と関連付けて語彙を増やす取組を行ったことでは、単語を覚えることの意義や使い方が理解できたため、単語テストにも前向きに取り組めた生徒が多く、覚えた単語が比較的良好に英文表現の中で活かされていた。**1** 学期には単語がわからずほとんど英文表現に参加していなかった生徒が、単語を覚えたことで英文表現に取り組めるようになってきたことから考えても、以前より効果的な語彙の学習法であったと言える。

7 結果の検証

1 学期末のテストまでは、場面設定から自分で考えて英文表現を行う問題では、解答が書けた生徒が 2 割弱の決まった生徒であったのに対し、2 学期末のテストでは約 7 割の生徒が何らかの英文を書くことができた。また、授業中の自己表現や小テスト、定期テストなどで英文表現を行った際、基本的な語順から間違っているケースは明らかに減少している。**12** 月に行ったアンケートでは、「英語で表現する力がついてきたと思う」と答えた生徒は **22** 名中 **21** 名、「英文の作り方(単語の並べ方)がわかりだした」と答えた生徒は **22** 名中 **17** 名、「英語で表現することが楽しい(面白い、好き)」と答えた生徒は **22** 名中 **20** 名と一定の成果が感じられるが、「英文の作り方(単語の並べ方)がまだあまりわからない」と答えた生徒も 5 名いることを考えると、今後も取組を工夫し、継続していく必要がある。

8 成果と今後の課題

この取組を通しての最大の成果は、生徒たちが英語で表現することを楽しめだしたということである。特に 2 学期後半の自己表現活動では、表現のテーマを工夫したこともあり、それまで以上に意欲的に取り組み、仲間の発表に対しても熱心に耳を傾けることができた。また、2 学期末のアンケートでは、英語が話せる(わかる)ようになってきたことへの喜びを感想として述べた生徒が多く、今後の学習に対しても、「もっとスラスラ話せるようになりたい」「英文をもっと書けるようになりたい」など、表現することに対して意欲的な気持ちを示した生徒が多かった。これらの声を受け、3 学期はスピーチに取り組むことを計画しているが、この取組では、基本の一層の定着を図りながら、既習の学習内容と伝えたい内容とを上手く結びつけ、より豊かな表現力へと発展させていく指導が必要である。最終的に、生徒たちが英語で表現することへの喜びや意欲をより強いものにすることができるよう、今後も努力していきたいと思う。